慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J·P·メイヤー著 五十嵐豊作・鈴木寛訳『マックス・ウェーバーの政治社会学』：マックス・ウェーバーとドイツの政治構造
Sub Title	J P Mayer : Max Weber and German politics, a study in political sociology translated by T. Igarashi & H. Suzuki
Author	多田, 真鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1966
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.39, No.9 (1966. 9) ,p.91- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19660915-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

拘らず、原爆を八月六日即ちソ連の参戦直前に落したのは、ソ連を考慮におき、ソ連の対日発言権を制するためのものでなかつたであろうか。原爆の投下は、対日戦早期完結の目標のみならず、戦後世界における対ソ優越権確保を目的とするものであるから、それがソ連との対立を高める原因の一つであつたことは否定出来ないところであろう。事実戦争直後、原爆という圧倒的軍事力を背景として、米国はソ連に対したのであつた。冷戦はこの原爆独占策によつて決定的となつたのではなかろうか。この意味において、原爆を契機とする熱戦の終結と共に冷戦の出発があつたといつても差支えないと思われる。

（内山　正熊）

J・P・Mayer: Max Weber and German Politics
A Study in Political Sociology

J・P・メイヤー著　五十嵐豊作・鈴木　寛訳『マックス・ウェーバーの政治社会学』
――マックス・ウェーバーとドイツの政治構造――

近年のわが国におけるマックス・ヴェーバー研究は、まさに白熱の状態とも表現しうるような、活気ある状況を呈している。

ここ一年余をふりかえつてみても、昨一九六五年六月には、大塚久雄、安藤英治、内田芳明、住谷一彦の諸教授によつて、「ヴェーバー学」（このような表現を用いてよいかどうかは疑わしいが）のそれぞれの専門領域に関する研究が、「マックス・ヴェーバー研究」（岩波書店刊行）の題名のもとに刊行され、さらに同じく十一月には斯学の先達大塚教授を編者として、「マックス・ヴェーバー研究――生誕百年記念シンポジウム――」（東京大学出版会刊行）が公刊されている。

後者の著作においては、わが国におけるヴェーバー研究の第一線に活躍する諸学者が、それぞれの専門領域に応じて執筆され、さら

にシンポジウムも附け加えられて、あたかも日本におけるヴェーバー研究の過去の遺産目録と、現在の財産目録が一括して呈示されているような感がする。このヴェーバー学への関心が現今のわが国でなぜこのように高まつてきたかは軽々に論ぜられない問題であると思われるが、ともかく社会諸科学界においては、ヴェーバーへの関心度はいやが上にも高まつてきていることは否定しえない事実であろう。

尾高邦雄教授は、このシンポジウムの閉会の辞において、「きのうもそうでしたが、第二日目のきょうは、とくにみなさんが『異常』とも言いうるほど熱心に討論に参加され、そのためにこれがたいへん長びきまして、定刻を過ぎること一時間余というようなことになりましたが、これは取りも直さず、このシンポジウムが非常に成功であつたということのいい証拠だと思います。……おそらく当のマックス・ヴェーバーも天界のどこかで喜んでいることだろうと思います。」とその盛会の状況を述べておられる。さて、このようなわが国におけるヴェーバー研究の上昇期に、五十嵐、鈴木両教授の労作になるJ・P・メイヤーの「Max Weber and German Politics」が邦訳されたことは、まことに時宜を得たものであり、かつ意義あるものといわなければならない。五十嵐教授が「訳者あとがき」で、著者メイヤーと同教授との交友が、アレクシス・ド・トクヴィル研究を媒介してである旨述べられているが、このことは政治思想史学を志すわれわれの頗る興味を抱いたところであつた。すなわち、五十嵐教授は「わたしは一九五〇年代から同じ研究領域で、かれ（J・P・メイヤー……筆者註）と接触するようになつて、それからおよそ一〇年余り書簡の往復がつづいた。ときには、かれから筆ぶしようをなじられながら！　したがつて、わたしが一九六三年に、ヨーロッパの旅にでて、かれとしたしく会う機会をえたとき、われわれはもはや旧知の間柄であつた。……

われわれは一九三〇年代から東洋と西洋とのそれぞれの政治的運命に耐えながら生きてきたにもかかわらず、そして、われわれの立場のニューアンスにもかかわらず、同時代人としてなにか共通のものをもつていることを改めて確認し合つた。このような出合いはありがたいことである。」と述べておられる。

トクヴィルというような偉れた政治学者をめぐつて、洋の東西に距たつた二人の研究者が、いわゆる魂の邂逅と交流をなしうるということは、一種の名状し難い暗示をわれわれは与えられた思いがする。

さて、メイヤーのこの著述が一九五五年にその第二版として刊行されてから、筆者も部分的には原著をひろい読みし垣間見てきたのであつたが、このたび両教授の邦訳を手にして通読する機会を得た。通読してみての所感を以下僅かながら述べてみたいと思う。まず第一に、このたびの邦訳に寄せられたメイヤーの「日本版への序文」についてである。そこにおいてメイヤーは「わたしのかたく信ずるところでは、こんにち、われわれは総合的社会学者としてのウェーバーから学ばなければならないがとくにアメリカであまりにもしばしばおこなわれているように、かれの術語を模倣することによ

つてではなく、かれの労作の内容をそのもつとも豊富に存在するところで、――かれの具体的な諸研究のなかで学ばなければならないのである。」といつているが、まことに適切な指摘として傾聴に価する言葉かと思う。そして、「わたしは日本におけるウェーバーの労作にたいする関心は、かれと同様に世界についての――東洋から見た――総合的な社会学的概念を獲得しようとする要求からでていると推測したい。」とも述べているが、メイヤーはわが国におけるヴェーバー研究の関心の方向が奈辺にあるかを実に適確に把握していることに一驚させられた。

第二は、メイヤーのこの著述は、マックス・ヴェーバーについてのユニークな「伝記」であるということである。ヴェーバー伝としては、すでに夫人マリアンネ・ヴェーバーの「Max Weber, Ein Lebensbild」が、すぐれて価値ある文化的遺産としてわれわれに残されてはいるが、メイヤーのこの著述も別の意味でのヴェーバーの「レーベンスビルト」にほかならない。すなわち、彼は、第一章「はしがき」に始まり、第二章「若くして完成の域へ（Towards Early Mastery）」、第三章「経済学から社会学へ」、第四章「世界戦争と敗北」、第五章「〈革命〉と共和制」、第六章「科学・価値および政治」、第七章「むすび」の七章において、一八八〇年からほぼ一九二〇年までのドイツ政治史と、それを直接体験し、自己の政治社会学のうちにその状況を理論的に受容したヴェーバーとの相互関連を客観的に叙述しているからである。メイヤーは「マックス・ヴェーバーはまさしく、はなばなしいかれの著作や講義そのもので、政治を実践した。」（三頁）といい、ヴェーバーの「青年時代書簡集（Jugendbriefe, 1876～1893）」、「政治書簡集（Politische Briefe, 1906～1919）」「政治著作集（Gesammelte politische Schriften（1921）」および、マリアンネ・ヴェーバーの「伝記」を縦横に引用しながらヴェーバー像を画いている。その意味で、邦訳書は「ウェーバーの政治社会学」と題されてはいるが、むしろ原書の通り「マックス・ヴェーバーとドイツ政治」の題名の方が読者にも誤解なく読まれるのではないかと思われる。さて、メイヤーの所説のうち、ここに一箇所だけ引例しこの紹介を閉じたいと思う。メイヤーは、第二章において「ビスマルクとかれの政策は、ライプニッツ街一九番地のヴェーバーの父の家で、たえずくりかえされた話題であつたにちがいない。これらの討論からえられた諸教訓は、マックス・ヴェーバーの政治的精神に恒久的な刻印を残した。これらの教訓を箇条書に見ておくことは重要である。」（一一頁）として、(1)ウェーバーはドイツの現実政策（Realpolitik）の意義と意味づけを学ぶ機会に充分に恵まれていたこと。それ故、ウェーバーの政治社会学のライトモチーフは権力国家の観念である。としている。(2)ウェーバーが青年期にビスマルクの実例から学んだと思われる第二の教訓は、かれのカリスマという用語によつても指摘できるといい、ある国民もしくはある民族が、ひとりの卓越した（カリスマ的）政治指導者を有することは神のめぐみの賜物である。ビスマルクが偉大な為政者であつたことは疑いえない。このことは、かれが究極的にドイツをよくしたか否かということとまつたく別問題であり、いずれにせよ歴史的問題ではない。と

している。

(3)ウェーバーが学んだ第三の教訓は、一八六六年以後、ドイツ的権力国家の大衆統合の一機構として、ドイツではじめて普通選挙制を利用したのは、ビスマルクそのひとであつたという事実、をメイヤーは指摘する。

すなわち、メイヤーは、要するにヴェーバーの政治社会学、いわゆる「支配社会学」における諸概念は、一九世紀から二〇世紀にかけてのドイツ政治の具体的な現実状況に当面しながら、そのなかから抽出し、それを概念化したものにほかならないことをベトーネンしようとするのである。さきにも所感を述べたように、この書はヴェーバーの著述を基にして、それらの著作活動がドイツの政治状況と不即不離の関係によつて形成されたものであることをメイヤーは明瞭に叙述している。第七章「むすび」において「われわれは前世紀の八〇年代の初期以来のドイツの社会―経済的・文化的発展のかがみとしてブルジョワーマックス・ヴェーバーをえらんだ。かれが典型的なブルジョワであつたからではなくて、かれの分析的・反省的能力があのようにすばらしかつたので、〈ドイツ問題〉を形づくつている複雑多様な糸すじを、かれに集約することができたからである。」（一六五頁）といつているが、メイヤーのこの試みは充分に果されているといつても過言ではなかろう。さらに、著者メイヤーと長年にわたつて交友を続けておられる五十嵐教授、ならびに鈴木教授によつてこの書が邦訳せられたことは、この書にとつてもその人を得たともいいうるし、現在のヴェーバー研究の上昇期において広く読者層を拡大したことはわが国のヴェーバー研究の底辺を一層拡張したこととともいわなければならない。

（勁草書房・一九六六年三月・五〇〇円）

（多田　真鋤）